

校訓

切磋琢磨



学校教育目標

「ふるさと近江八幡に愛着と誇りを持ち、自ら心の器づくりに励み、未来を切り拓く生徒の育成」 にこまる

令和元年5月8日 No.2



「個性と可能性を伸ばすとは」

近江八幡市立 八幡中学校長 野村 正

5月だというのに、東北、北海道では雪が降っているという便りも聞きます。今年の冬はとても穏やかでした。その反動でしょうか。日中はすでに初夏のような暖かい日々が続いていますが、寒い日もあり、寒暖の変化に体がついていかずだるく感じるのは私だけではないと思います。

先月の入学式で、199人の新入生を迎え、平成31年度の八幡中学校は全校生徒600人でスタートしました。新年度が始まりすでに1ヶ月がすぎ、どの生徒も新しい学年で自分らしさを発揮し頑張ろうとする意気込みが伝わってきます。私は毎朝、15分程度校門に立って登校してくる生徒一人ひとりに「おはよう！」と声を掛けています。ほとんどの生徒はあいさつを返してくれます。中には満面の笑顔の生徒、はち切れんばかりの大きな声の生徒、恥ずかしそうにペコリと頭を下げる生徒などいろいろな返し方をしてくれます。自分からあいさつをしてくれる生徒も随分増えました。生徒にとっても校長である私にとってもさわやかに1日のスタートを切れる貴重な時間帯です。毎日見ている生徒の表情が少し曇っていたりすると「何かあったのかな？」と気にもなります。こうした1日の始まりを今後も大切にしていきたいと思っています。

さて、三年生はつい1ヶ月前までは二年生でしたが、三年生という最上級としての立場を意識してか、ずいぶん精神的にも成長したなと感じています。部活動における下級生への指導の様子や言葉遣いなど、三年生らしくなってきたように感じているのは私だけではないと思います。子どもたちの成長のすばらしさを実感する瞬間でもあります。

本校の学校経営目標の一つに「一人ひとりが大事にされる学校」を掲げています。互いに違いを認め理解し合い、学校という集団の特性を生かし共に成長できるよう取組を進めています。600人の生徒がいれば、600の個性があります。人それぞれに好き嫌いもあると思いますが、好きなことは結果がどうであれ続けることができます。学校での学習も好きな教科は自然と得意になりますが、いったん嫌いになると苦手意識に繋がっていきます。「好きこそものの上手なれ」ということわざがありますが、好きなことは自然と上達していくということです。これを全ての学習に当てはめてほしいとは思いませんが、せめて嫌いにはなあってほしくないといつも思っています。いったん嫌いになったことは二度とやりたくないと思うのが人間の常で、将来、もう一度やってみよう、学び直してみようという機会を奪ってしまうからです。ですから、生徒が好きになれるように取り組んでいきたいと考えています。少なくとも嫌いにならないようにしたいものです。それが可能性を広めることに繋がると 생각합니다。

